

昨年の12月に引き続き第2回目の現代人物肖像画展である。今回は展示作家のうちもっとも早く生れたP・セザンヌ(1839~1906)を筆頭にO・ルドン, G・クリムト, E・ムンク, H・マチス, G・ルオー, M・ペヒュタイン, P・ピカソ, 藤田嗣治, 安井曾太郎, J・ミロ, A・ジャコメッティ, 海老原喜之助, W・デ・クーニング, S・ダリ, 松本竣介, 麻生三郎, 駒井哲郎, R・ハミルトン, T・ウェッセルマン, J・ダインそして最後はD・ホックニー(1937~)の22名の内外諸作家による30点の作品——水彩, デッサン8点, 版画22点——の展示である。

これらの作品はほとんどこの一年の間に折に触れ私の好みで選んだものである。前回よりも作家も点数も増えているが、内容の点になるとこれはご覧の皆様のご批判を待つしかない。ただ私としてはオヤと思われるような面白い作品もあるのではないかと秘かに期待している次第である。

こうして一わたりこれら人物肖像画を眺めていると、ひとつの感慨に耽らざるを得ない。というのはもし百年前に人物肖像画展を催したとしたら、これほどヴァライアティに富んだ展示にはならなかつたであろう、と思う。19世紀の人物肖像画は写実主義的な表現形式が主流を占め、勿論、作家それぞれの個性において変化があるにしても、今ここでみられるようなくも多様な表現を一堂に集めることは不可能であったろう。

さらに、いささかオーバーな表現であるが、この人間をテーマにした展示は今世紀における価値観の分裂ないし多元的な価値観の共存を示している。と同時に、表現の自由さ、その自由を許容している環境、社会にわれわれが生きていることをも示している。

以上のような意味で、これら多様な作品をみることができるのは楽しいと同時に幸せなことであると思う。戦中派の感慨であろうか。

1979年12月 佐谷画廊

佐谷和彦